

業務展望レポート			
10	近藤 結香	所属名	東温市教育委員会 学校教育課
		職名	指導主事

## [1]研修参加の意義

私が初めて「ネパール」という国に出会ったのは、小学生の時である。本県宇和島市出身の岩村 昇医師がネパールで医療活動が続ける中で古切手を回収してお金に替え、ネパールの子どもたちに文房具等を届けている話が国語の教科書に書かれてあった。古切手を集めた記憶があるのは、私だけではないと思う。そして、中学校教員として教鞭をとる中、NHK取材班の手記でネパールを舞台にした道徳資料「ネパールのビール」に出会った。人は皆他人を疑う弱さや醜さをもっているが、この資料はそれを悔いる人間の気高さに気付かせてくれた。初めて読んだときのあの感動は、今でも忘れられない。

そんな思いのあったネパールへの研修に今回参加させていただき、私にとってネパールは、今まで以上に特別な国に変わっていった。

中学校社会科の学習指導要領では地理的分野の学習において、世界各地の生活と宗教とのかかわりや、世界の主な宗教の分布、また公的分野の学習では、国際社会における文化や宗教の多様性について学ぶようになっていく。そして、3年間の社会科学習のまとめとして、貧困削減や環境保全等の観点から持続可能な社会の形成について考える学習(ESD)が加わっている。

今回の研修は限られた時間ではあったが、カトマンズ市内の寺院や王宮、公共井戸、市場等を訪問する中で、ネパールの宗教、文化、社会について実際に体感することができ、たいへん意義深いものであった。特に、パシュパティナートのアルエガートで見た葬儀や生神クマリの館は、ネパールの人々の死生観を垣間見ることができた。道徳教材として日本に持ち帰ろうと考え、視察先や訪問先で必死に探した「ネパールのビール」＝「STAR」は結局手に入れることができなかったが、社会科教員として多くの教材を手にすることができた。

今後は、私自身が直接学んだネパールの人々のものの見方や考え方、生き方などについて、共生の視点から教材開発や授業プログラムの作成を行い、南北問題の解消に向けた教育や学校現場で行われているESDの充実に、微力ではあるが貢献したいと考えている。

## [2]海外研修全般に関する所感

ネパール到着後にJICA事務所受けたネパールについてのブリーフィングで、この研修の意義が高まった。

なぜ、日本を始め諸外国はネパールを支援するのか、人道的立場からの支援は当然である。しかし、ネパールが地政学上重要な位置にあるため外交的支援という政治的側面もはずせないことを学び、国際社会の在り方について改めて考える契機となった。

ネパールにおける日本の国際協力の特徴として、[①現場主義②持続性のための能力開発③特別な友好関係]の3点から説明を受けたが、ネパールの中には「日本にやってほしい」という思いも強くある。「ネパールを本当に変えていくのはネパール人」という日本の支援の在り方を浸透させていくには、まだまだ時間がかかると感じた。また、「本当に支援が必要なところには、JICAはアクセスさえできない」という話を伺い、草の根協力で国全体を変えていくことの難しさや、長いスパンでの継続的支援と人間関係の構築の重要性を再認識した。

ネパールの抱える教育問題についても、勉強をさせていただいた。政府組織が十分に機能していない中、発展途上国であり教育予算も限られている。教育局長からは、「全国の子どもたちを就学させ、教育の質を高めたい」というお話を伺った。日本とネパール、それぞれの国で抱える教育課題こそ異なるが、「教育が人をつくる」ことに変わりはない。学校訪問やホームスティ村で出会った子どもたちの澄み切った瞳を思い出すとき、私もまた教育の原点に戻って、目の前にいる児童・生徒の指導に真摯にあたりたいと考える。

研修最後のJICA事務所での報告会で、西前NGOデスクが語った言葉が忘れられない。「国際理解教育は同情ではない。ネパールって国は面白い。そんな好奇心から始まると、困っている人がいたら助けたいと思うようになる。」—シャプラニール事務所、ラブグリーンジャパン等、この国で支援活動に取り組んでいる日本人の方々も皆、ネパールの人々と同じ物を食べ、同じ所に住み、同じ目線で暮らしていた。そこには、発展途上国を支援するという同情的な気持ちは一切なかった。国際協力について考えるとき、常に私自身へ投げかけていきたい言葉である。

**[3]特に印象に残った視察・訪問先を3つ挙げ、その内容をご記入ください。**

視察・訪問先	所感
<p>マナスワラ村小学校</p> 	<p>つり橋を渡った対岸の学校で、1年生の子どもたちが手に一杯の花びらで迎えてくれた。国歌を歌うときの子どもたちの姿勢のよさ、話を聞くときの目の輝き。一生懸命の姿に感動した。低学年は教科書もなく、教師の創意工夫で授業を行うとのことであり、また教師としての身分も不安定だと聞いた。この国では特に、公立学校の教師のモチベーションをあげることが課題と感じた。みんなで歌った「Resham Firiri」は一体感があり、楽しかった。同行の若い先生方がゲーム等の準備を周到にしてくださり、たいへん有難かった。</p> <p>子どもたちへの衛生指導で、平時は2時間近く歩いて小学校をまわっている福山村落開発普及員の行動力と手作り教材に、頭の下がる思いがした。</p>
<p>パトレケット村ホームステイ</p> 	<p>乳しぼり、計量、牛の餌づくり、朝食作り等、いろいろな体験をさせていただいた。家族団欒の場所は1階の土間(台所)であり、食卓台で中学生1年生の娘さんが宿題をしていた。子どもごろの自分の家のように、懐かしかった。親が料理をする姿、子どもが勉強をする姿が互いに見え、個が優先されている日本の家庭が失ったものを感じた。また、朝は家の掃除をしてから学校へ行く子どもの姿はここでは当たり前のことかも知れないが、感心した。</p> <p>見せてもらったネパールの教科書は、国語以外、すべて英語表記だった。私と受け入れ家族との意思疎通は娘さんを通した英会話が中心だったが、小学校から受けている英語教育のレベルの高さを感じた。</p>
<p>カトマンズ郡廃棄物処理場</p> 	<p>ネパールのごみ問題についてはネットで多くの情報が収集できるが、実際に目の前にすると強烈だった。分別についてのきまりは特になく、収集場も決まっていないと聞いたが、一日2回の回収も間に合わず、行政施策が後手後手になっていると感じた。美しい谷が多くのごみにより埋まり、地域の人たちが生活のためにそのごみを拾っている姿を見たとき、ネパールにおける最終処理の在り方の難しさについて考えざるを得なかった。</p> <p>学校における環境教育のねらいは、感受性、考え方、実践力がキーワードになっている。共生や循環という視点から、環境問題に取り組む必要があると痛感した。</p>

**[4]今後の業務における活用の可能性**

1. 授業実践

11月に、小学校4年生の社会科単元「ごみのしよりと利用」の発展的学習で「ネパールのごみの処理」を取り上げ、環境教育の視点から授業実践を行った。この小学校は平成25・26年度愛媛県教育委員会から環境教育推進事業の指定を受けている。授業では、現地で購入したネパール国旗やCD「Resham Firiri」を使いながら写真でネパールの生活の様子を紹介し、世界の人々の多様性に気付かせた。また、東温市のごみ分別の仕方をもとにネパールのごみ問題を取り上げ、JICAの活動を紹介した。子どもたちは環境問題を広い視野でとらえながら自分の考えを深め、国際社会の中で世界の人々が助け合って生きていくことの大切さにも気付くことができた。



2. 今後の展望

- 中学校3年生の社会科単元「国際問題とわたしたち」において、貧困問題の中で児童労働を取り上げ、日本の国際貢献の在り方や解決すべき課題について、学校へ出向き授業を行う予定である。
- 中学校社会科における生活と宗教のかかわりや文化の多様性についての指導の際、学校に資料提供を行うとともに、小学校の「総合的な学習の時間」や東温市国際理解教育主任会等、国際理解教育の視点からも児童・生徒や学校に関わることができる場を考え、教育現場に研修の成果を伝えていきたい。